

多様な性／ジェンダーについての一考察

——インドのヒジュラとアメリカ先住民ナバホ族の

「ベルダーシュ」の事例を通して——

藤崎 康彦

要旨

男性、女性の他に「第三のジェンダー」を認識する文化があるという主張が、文化人類学的研究の一部でなされることがある。本稿はその理論的意味を考えることを目的として、具体的な民族誌のレベルで検討を行い、いかなる条件で、またどのような理論的意味合いで「第三のジェンダー」が可能かを考察する。

具体的には男でもない、女でもないというカテゴリーがある点で共通な社会である、インドのヒジュラとアメリカ先住民のベルダーシュ、特にナバホ族のそれを検討した。ヒジュラの場合には呪術・宗教的機能が明瞭であり、かつはつきりとしたイニシエーションがある。他と区別される地位が与えられる。これに対してナバホのベルダーシュの場合はより日常的な存在であり、特別に他と区別されるような地位が与えられるようには見えない。しかし全く聖なる性質が認識されていないわけでもない。地位自体がじつは曖昧である。

暫定的なまとめとして、むしろ仮説的ではあるが、西欧的な「二元的対立」に基づくジェンダー観を有する文化では、例えば性的に曖昧な「間性」は通常のジェンダーカテゴリーには納まりにくく、「聖なる」存在と位置付けられるのではないか。それに対してそのような二元的対立が緩やかで、異なる性／ジェンダー観を持つ社会の場合は、「第三のジェンダー」カテゴリーも認識する可能性があるのではないか、と考える。

一 本論の目的

「ジェンダー」概念はフェミニズムに大きな理論的武器になったといわれている。生物学的概念である性のほかに、社会文化的な行動や価値のレベルでの性差の概念を作り出したことで、性差を「自然化」することによって女性を縛り付けておく「男性中心的な」イデオロギーを批判する契機を得たとされる。生物学的な性概念を人の存在を規定する根本的なものとする発想は、出産はもとより育児などを優れて女性的な機能とすることに使われたのである。

性差の表現である「らしさ」などは後天的に文化的に形成されたものと理解することで、ジェンダー研究は大きく進展したかのように見える。しかし、欧米の文化的伝統の中から形成されたジェンダー研究は、ある理論的困難を内包していたように見える。ひとつは、既に指摘されて研究が展開されていることだが、欧米文化のジェンダー概念が男女の二項対立的分類の概念枠組にもとづいていることである。これは日本の現在にも当てはまる指摘であろう。もう一つは、これは私の個人的な問題意識にまだとどまっているかもしれないが、ジェンダー意識を欧米の近代的な個人概念からのみ捉えているのではないかとの疑問である。

第一の問題は次のようなことを私に意識させる。性とジェンダーについては、前者が現実的・物質的基盤で、その上に文化的なジェンダー概念がかぶせられているかのような理解がなされがちである。男らしさや女らしさは文化によって異なっているという指摘は、「文化相対主義

的」で分かりやすいが、むしろ逆に性を実体化しているかのようなことが気になる。文化人類学では「自然」は区切りのない連続的なもので、そこに概念で区切りを入れるのが「文化」であると教える。そうであるなら自然に属する性は連続的なものであり、男女という性別自体が文化的構築物であるとの発想も可能である。

あるいはジェンダーこそが文化概念として基本で、ジェンダーとしての男性・女性が性としての男女に投影されているのかもしれない。このことを分からせてくれるのが、身体的に曖昧な性である。医学ではかつて「半陰陽」といわれていたようだが、今は「インターセックス (Intersex)」とか「間性」が使われているようだ。しかしこれは特殊な専門的分野での話であり、日常的な用語ではない。男女どちらとも明瞭に決しかねる状態は現実にあるのに、例えば日本では出生届に、そして戸籍に男女いずれかが記載される。この場合の男女は生物としての性を示す。性概念自体が文化なのである。むしろジェンダーが先で、男性と女性の二項対立的分類が、性に反映しているのではないかと私は思う。

とするならば、このような曖昧な性についての扱いは、文化によって異なることがありうる。二元的なジェンダー概念のみの文化と、もう少し多様な(多元的な)ジェンダー概念があるところでは多様な生が可能かもしれない。そのような関心から人類学的な資料を点検してみることが第一の課題とし、あわせて理論的な洞察を得ることを目指したい。

近代的な個人についての問題意識は、私の中でまだ少しはっきりしたものにはなっていないが、上記の問題意識を考える過程で、育ってきた

ものである。ジェンダー意識に関して欧米ではかつて「トランスジェンダー」「トランスセックス」が話題になった。実はここに、しばらく前に日本でも実施されて話題になったいわゆる「性転換手術」が関係する。自分の身体的性と性自認（ジェンダー意識）にずれがある場合、性別不快症候群（gender dysphoria）とか性同一障害といわれて、身体的性を変更する手術を「医学的治療」として正当化することがなされている。ここでは変更は二元的対立に基づき反対の性に身体（の外形）を変えることで実現する。しかし、欧米ではあえてトランスセックスを目指さずトランスジェンダーでさらに思想的にラディカルな表現がなされているようである。つまり従来の伝統的な男女観にあわせるのではなく、例えば女らしさにしても古くからの感覚にとらわれない女らしさを主張して身体的にも表現するようになっている面があるようだ。異性装で女性を表現したい男であってもふっくらとした、丸みのある、やわらかい女性の身体ではなく、ボディビルなどで鍛えられ、筋肉で引き締まった、しかし均整の取れたスタイルを、女性として美しいと表現するような傾向である。（cf. Bolin, 1996）

それ自体は個人の自由だからと思ってみると、ここには自分の良しとすることを確信をもって主張する主体的な人格を想定することができる。欧米の中から二元的なジェンダー観に動揺を与える動きが出てくるとき、それはこういう人格の存在を背景にしていると考えられる。しかし人格のありかたはこのような独立性の高いものだけではなく、自己の属する文化の価値観に何ら矛盾を感じることなく適合している場合もあるであ

ろう。むしろ文化と人の関係とは本来そういうものである。とするなら、欧米文化ではないところでは、同じジェンダーという概念を用いて表現しても、そのジェンダーのあり方が異なってくることもあるのではないかと思ったのである。しかしこれは今回は具体的に展開することができない。第一の問題関心に絡めて理論的可能性を考えてみるにとどめたい。

二 理論的枠組と仮説

私の理論的枠組と仮説は次のようなものである。先ずジェンダーの多様性についての仮説を提示すると、厳格な二元対立的な（排他的な）ジェンダー観がある文化では、曖昧なジェンダーは日常的存在としては位置付けを得ることが難しい。具体的には、それは何らかの非日常的存在とされる。それに対して緩やかなジェンダー観の場合は、他の男女と同様な、あるいはそれに準ずる位置付けを社会の中で得られるかもしれない。

このような仮説を支える理論的枠組は、人のカテゴリーについての理解である。具体的には私のこれまでのシャーマン、シャーマニズム研究から発展してきた。特に日本の盲目の巫女であるイタコや、盲目の女性の旅芸人である瞽女（ゴゼ）などの分析から得られた枠組みで、次のような理論モデルである。（cf. 藤崎、一九九八）

日本の村落では、「村人」（村に居住する普通の人）の概念には「ジェンダー」と「労働すること」が意味成分として含まれている。年齢階梯的な構造の中で、性的に未分化・未成熟な子供から性的に成熟した若者

と娘になることは、はっきりとジェンダーを身に帯び、村の一人前の働き手として位置付けられることを意味する。このとき盲目の人々は決定的に困難に出合う。村の生活を基準にする限り、盲目では若者や娘になっても働きは一人前とはみなされない。このときこの村の人のカテゴリーから離脱し、イタコや瞽女として通過儀礼を経験し、異なる人のカテゴリーに自らを位置付けることを行う。特にそれまでの生家の家族関係から離脱し、イタコや瞽女の師匠との擬似的な親子関係を象徴的に形成し、彼らのネットワークを維持することがこの通過儀礼の意味である。

イタコにも瞽女にも自らのカテゴリーの神話的正統性を物語る伝承がある。またイタコは呪術的な力を持つ巫女として村に居住しつつ村落生活の周縁に位置付けられる生活をし、瞽女は町に瞽女宿を作り共同生活をしつつ農村を旅して門付けをする。旅芸人であると共にそれにとどまらず、豊饒の担い手であるかのような意味付けを村人から受けることもある。

このように、人のカテゴリーには通過儀礼を経て世間の人とは異なる、呪術・宗教的な職能に移行する場合のあることが見られる。これがジェンダーのカテゴリーに関しても適用できるモデルとなるのではないかというのが、私の本稿での理論的立場である。

以下にインドのヒジュラとアメリカ先住民の例を検討する。それらは性的に曖昧な現象の文化的認識を含んでいることから取り上げるものである。先ず二章にわたりそれぞれの特徴を記述してまとめ、最後の一章で考察を行いたい。

三 ヒジュラ

以下ヒジュラについては、ヒンズー社会の共通の特徴として、ナンダ(Nanda, 1996)の記述に基づいてまとめる。

ナンダによればインドでは性は生物学的なものに根ざし、二項対立的なものとして構成されている。女性は性的な力が強く、男性はむしろ弱くて、潜在的で目立たないものになっている。女性の性的な力は生命を生み出す源であると共に、過剰にエロチックなものになると、食欲にむさぼり、むしろ生命を危機に陥れる。特に男性の精神性にとっては危険なものとなる。したがって、女性は男性の権威によって完全に制御され、その性的な力も抑制されなければならない。

ヒンズーでは二項対立的で相補的な性/ジェンダー観を持っているにもかかわらず、その変異が知られている。それには宗教的な背景がある。古代の創世神話は、両性具有や半陰陽的な祖先を登場させている。リグ・ヴェーダでは天地創造以前はあらゆる区別のない混沌で、性の区別もないとされている。それを古代の人は両性具有的、間性的なイメージで表現していた。

このようなことからヒンズーでは多重的・多元的な性や、ジェンダーが可能性として認識されていた。主要な性/ジェンダーカテゴリーに合わない人はステイグマを与えられるが、ヒンズー世界の中ではそれなりの位置付けと同一性を与えられた。このような性/ジェンダー変異の一つがヒジュラである。ヒジュラは文化的には「男でも女でもない」と定

義される。男として生まれるが、儀礼的な外科手術による変容で、代替的な第三の性／ジェンダーカテゴリーとなるとナンダは理解する。

ヒジュラはバフチャラ・マータという、トランスジェンダー現象に特に関連付けられているヒンズーの母神の一つを礼拝する。彼らの伝統的な職業は結婚式と子供（特に息子）が生まれたときに演奏する（儀礼を執行する）ことである。彼らは歌い踊り、女神の名において子供と家族に対し豊饒性が増えることと繁栄を祈願する。支払いをその代わりに受ける。

男ではない存在としてのヒジュラ

インドでは二つ以上の性／ジェンダーを認識していたことは紀元前八世紀頃から記録されている。ヒジュラのような代替的あるいは第三のジェンダーは欠陥のある男性と見られていた。その欠陥の中核は性的なインポテンス、あるいは子供を生ませることができないということである。現在のインドでもヒジュラは宦官あるいは間性と訳されていて、性的なインポテンスが強調される。ヒジュラは文化的には次のように定義される。すなわち男として生まれたが、女性の服や行動や仕事を選び取る人で、男性でも女性でも男でも女でもない。彼ら自身は「女に欲望を抱かない男たち」として定義する。また、言語的にも文化的にも性行為において受動的役割を取る他の男たちとは区別されている。

ヒジュラの文化的定義の中核にあるのは、構造的、機能的な性的不能であり中間的な性／ジェンダー地位である。だから生物学的に間性でな

い人がヒジュラになりたいと思うと去勢手術（外性器切除）により彼らの性／ジェンダーを変えなければならない。

女であって、女ではない存在としてのヒジュラ

ヒジュラは「男から男を取り去ったもの」であると共に「男に女を付加したもの」であり、女性的なジェンダー役割の多くを身に帯びている。またヒジュラであることは男としてのアイデンティティーを捨てることだけでなく、女としてのそれを身につけることである。彼らは交通機関で「女性専用席」の使用を要求したり、国勢調査では女性として数えられることを要求したりする。しかし、同時にまた「女ではない」。誇張された極端な女性的な表現は普通の女性の控えめな表現とは対照的である。

彼らが自らを女だとは思わない主たる理由は、女性生殖器を持たないこと、したがって子を産めないことである。彼らの中にはこれについての神話的な話が伝承されている。この話によって彼ら自身が女のように生むことはヒジュラの本質に反すると思っということが分かる。

宗教的同一性

ヒンズーの物語の中でのアージュン (Arjun) にヒジュラは同一化している。これは一種の性的に曖昧な存在であるが、その曖昧さを通じてシヴァ神ともヒジュラは関連している。シヴァはその物語の中で、個人的な生殖力を自らの去勢で捨てたことで、宇宙的な生殖力（豊饒性）を

与えるものとして描かれている。このパドクスがヒジュラの存在を説明する。個人的には去勢され不能なものであるにもかかわらず他者に豊饒の祝福をもたらすことができるというパドクスである。

以上が意識的なレベルでの同一化とすると、無意識的には地母神との同一化がある。ヒンズーのインドでは救済と成功は母神への服従に同一視されている。男性機能に欠陥があればそれだけでヒジュラになれるわけではない。神（母神）からの召命を受けたものでなければならぬ。ヒジュラにとって、去勢手術は再生（再誕生）の一つのかたちであり、子供の誕生の象徴的な要素を多く含んでいる。手術のあとでのみ母神の媒体（乗り物）となる。母神の一形態としてのバフチャラ・マータに手術によって明瞭に関連付けられる。それによって婚礼や誕生時の祝福の力を与えられるのである。間性として生まれたのではない人にとって、手術は不能の役立たずの男性をヒジュラに変容させ、母神の宇宙論的な生殖能力の乗り物にさせるものなのである。

苦行者としてのヒジュラ

インドではジェンダーは十全な社会的人格 (person) を持つための重要な部分である。結婚によって男と女は特に息子を持つこと、家系をつなぐことが期待されている。結婚しない人、不能の男、月経のない女性だったがって不完全な人 (person) である。しかし子を産むことのできない人も男であれ女であれ社会から排除されることはない。また結婚したくない人も排除されることはない。インドではそれらの人のために

特別なカテゴリー、あるいは役割が用意されている。それが苦行者あるいは現世放棄者であって、社会の外側に位置付けられながらその一部分である。このカテゴリーは結婚している男女というカテゴリーを超越することから超越的な存在へ変容することができる。

ヒジュラは性的な欲望の放棄、家族的・親族的絆の断念、生活を人々の喜捨に依存することなどによって、自らを苦行者と同一視する。このようなあり方はヒンズー社会のダルマの観念によって社会的に受容され正統なものとして承認される。

儀礼的役割と社会的受容

その受容は儀礼的役割を与えられることで表現されている。ヒジュラは子供の誕生祝に儀礼を行うことが許されているが、そのとき子供を調べ、その子が間性ならその子は自分たちに属すと主張し、子供を引き渡すことを親に要求する。またヒジュラは結婚式のあとにも娯楽を提供する。派手な性的な演技で参加者を楽しませると同時に、豊饒性を祈念する。しかしただの芸人ではなく、祝福もできるし呪詛もできる、社会の外側にいる潜在的に危険な存在として、人々から両価的な感情をもって見られている。

ヒジュラ社会の社会構造

インドの社会構造はカースト制に基づいている。カーストは、部族的

・民族的にも異なる自律的社会集団と職業とを排他的に結び付けていて、それらの成員を管理し、集団同士を階層秩序のうちに位置付け、権利と特権を与えている。ヒジュラの社会はカーストではないがカースト制のような特徴をもっている。例えば彼らの儀礼執行者としての仕事を彼らに独占的なものと主張する。その成員を管理する究極の制裁は、ヒジュラ社会からの追放である。そして自らの正統性をその起源神話においている。

ヒジュラは一説にはインド全土に五万人いると推定されている。北部の都市に多いといわれているが、全国どこにでもいる。ヒジュラは全国に広がっている一種の下位文化に生きている。しかしそこには地方的変異もある。

ヒジュラは普通五人から二十人の間で一緒に「所帯」(household)に住んでいて一人の年長者を「管理者」としている。ヒジュラ各人はその運営に何らかの寄与をする。

「所帯」の構成は柔軟である。そこに寄留する個人は自由に移動する。飽きたとか、不満とか、言い争いなどで出てゆき、他の「所帯」、他の地区、他の都市へ動く。全国的なヒジュラ社会は「家」(house/houses)、あるいは名前のついた小集団からなる。「家」は生活の単位ではなく、リネージやクランに似たものである。各々の「家」は共通の祖先を認め、それ自身の歴史と特別な掟とを持つ。どの特定の「家」もいくつかの異なる「所帯」の成員を含む。

それぞれの「家」には「親分」(naik)と呼ばれる指導者がいる。主

要な大都市では異なる「家」の「親分」たちは一種の評議会を作り、政策を立て、紛争を調停している。「親分」の下のレベルには「師匠」(guru)がいる。ヒジュラの間で最も大事な関係は「師匠」と「弟子」(chela)との関係である。

ある個人は「師匠」の支援のもとにヒジュラ社会に正式に加入する。「師匠」は「弟子」に女名前を与え、イニシエーション儀礼(去勢手術)の費用を負担する。新しい「弟子」は「師匠」と「家」の掟とヒジュラ社会に従うことを誓約する。この「師匠―弟子関係」は拡大家族の理念を写したものだ、理想的には一生続く相互的な互酬的な関係なのである。さらに「師匠―弟子関係」を拡張することで、全インドのヒジュラは擬制的親族関係で結び付けられている。これらの関係も情緒的であり互酬的である。彼らが何かにつけてこういう絆を使って集まる機会は少なくない。

ヒジュラになる人はあらゆるカーストから出ているし、ヒンズーのみでなくムスリムやキリスト教を信じる家庭からも出ている。しかしout-castからは出ていない。ヒジュラ社会の内部では出身カーストは無視され、差別はなく、清浄さとか穢れの問題もない。他の苦行者のようにヒジュラのアイデンティティーは(世俗の)カーストや親族への帰属を超越するのである。

四 「ベルダーシュ」

「ベルダーシュ」については、用語について述べておこななくてはなら

ないことがある。まず「ベルダーシュ」とかぎ括弧をつけて表記する。

これはアメリカの現在の慣習に倣うものである。「ベルダーシュ」は北アメリカ大陸に西欧人が入った当初から記録に残されている。西欧人はアメリカ先住民の社会に、生物学的には男であるのに、女性の服装をし、女性の仕事を行い、西欧人の目から見て罪深い、他の男性との性愛行為を行う人々がいることを認識した。これをフランス語から入った「ベルダーシュ」(berdache)ということばで記録した。このようなタイプの人物は、先住民の多くの部族社会にいたので、それぞれに固有の用語がある。例えば本稿で扱うナバホ族には「nadle」(発音が不明なので、このままローマ字表記とする)がある。しかし包括的な用語がないと当面の記述に不便であるが、「ベルダーシュ」の代わりに提案されている「two-spirit」は特有の思想的立場から発想されているので、ここでは採らない。(cf. Jacobs et al. eds., 1997) ベルダーシュには西欧人のアメリカ先住民に対する蔑視と偏見が含まれていて用いるべきではないが、用いるときには引用符を付けて注意して用いることが求められているので、これには従い「ベルダーシュ」と表記する。

また実際にはその性質に部族ごとに特徴があるようなので、各部族それぞれの用語を用いて論じるのが適切であろう。例えば「nadle」のようにである。しかし、これらについてはどのように発音するのか確かめることができないので、アルファベット表記にせざるを得ず、それだけで通すことも表記上難しいので、適宜「ナバホの『ベルダーシュ』」のように包括的であつ問題の多い用語であることを認識した上で用いる便

法を採ることにする。

私がこの現象に関心を持った契機は、シャーマニズムとシャーマンのアイデンティティーなどの、人のカテゴリーとその社会的位置付けの観点からだった。「ベルダーシュ」には例えばジェンダー的には男性と女性の間の両義的な(曖昧な)位置付けを持つことと、しばしば(部族によつては)シャーマン的な存在でもあることに関してである。関連して、ジェンダーに関しては、男性は戦士としての勇猛さが価値として求められている(例えば平原インディアンのような)社会では、その価値に適応できない男は自ら女性的価値を選び取ることで、自己の社会的位置付けを得るのであると理解するのが常識だと思っていた。(cf. 祖父江、一九七九)

しかし、そういう、初期の人類学者が作った常識的理解とは別に、アメリカではアメリカ先住民の文化伝統再興の動き一般と、ゲイの先住民の社会的認知を求める動きなどが結び合つて、「ベルダーシュ」もより正當に評価しようとする関心が大きくなった時期があるようだ。これにゲイの白人たちの関心も加わつたようである。一九八〇年以降「ベルダーシュ」の研究が盛んになるが、まとまった本を出した人のかなりが自らゲイであることを表明している。

「ベルダーシュ」の特徴

「ベルダーシュ」はどのようなことを具体的に行動で表現しているのか。ラング (Lang, 1998) ではその存在の報告例のあるアメリカ先住

民のすべての部族社会の事例を整理して表にしている。それによれば、報告例のある全部族の五〇％程度かそれ以上で見られる「ジェンダー役割」は、女性の仕事をすること、女性の服装をすること、男性との性関係が結婚、女性らしいボディ・ランゲージや話し言葉を用いることなどである。これは「ベルダーシュ」が具体的には身体は男である場合のことであり、実際に「ベルダーシュ」は女性のそれより男性のそれが事例として多いことの反映であろう。もう少し頻度を下げて一五％程度以上の項目を挙げると、多いほうから、男性との性行為（これは「ベルダーシュ」が生物学的にどちらの性の場合かはっきりしない）、女性と共にいることを好むこと、子供の頃から女性的であったこと、女性よりも女性の仕事を上手にすること、ヴィジョンに基づいて行動すること（ヴィジョンについては後述）、治療者であったり呪医であったりする、男性の仕事を行う（生物学的に女の場合と思われる）、女性との結婚や性関係（同じく）、女性の工芸を行う、間性である、「聖なる」人である、などである。

頻度は低いがその社会内部での位置付けを考えるのに重要な手がかりとなる特徴が以下に続く。例えば葬儀に関与する、女性の身体的なことを真似する（モハーヴェ族が有名で、月経を真似て出血させたり、出産の真似事をしたりする）、その地位を確認するのにテストを行う（後述する）、同じく儀礼を行う、戦闘や襲撃に参加する（男女とも）、夢によって行動する、特殊な宗教的機能を有する、仲人をする、サン・ダンスで役目を果たす、子供や大人に名前を与える、などがある。

「ベルダーシュ」のなり方

このような役割を果たす「ベルダーシュ」にはどのようなようになるのか。この過程がその人のカテゴリー、あるいは社会的認知を得ることと関係すると思われるので、ラングの記述から整理してみると、次のようになる。なお、これらは先天的な間性の場合には考慮してはいないと思われる。

(1) 幼時から徐々にその傾向が現れるとされる場合。このような行動上の場合には先天的な傾向か、それに加えて何らかの家族や社会からの働きかけや誘導がある場合に分けられる。

(2) 思春期以降に突然変化する場合。このほとんどはヴィジョンや夢によって指示されたときされる場合である。ヴィジョンや夢はアメリカ先住民の大きな特徴の一つである。ヴィジョンは意識の変容状態における神秘的体験で、一種の守護霊と直接的に交流するようなことである。例えば平原インディアンとされるグループでは若者が自ら求める身体的苦痛を通してヴィジョンを経験する。その他に極度の孤独と飢餓などの極限状態で守護霊を求めることが、人として自立することの基本である社会もあり、この例としてヘアー・インディアンを原ひろ子（原、一九八九）が記述している。ヘアー・インディアンにも「ベルダーシュ」はおり報告例（Broch, 1997）があるが、ヴィジョンとの関係はその論文では不明である。いずれにせよ、この、ヴィジョンなどを求める場合は、その経験で全く百八十度変化してしまうのではなく、それまですでに表

現されていた傾向性を追認する、いわば社会的に正統化するための仕掛け、最終的な仕上げをするための一種の召命の表現とでも考えたほうが良いようである。

その他に、正統化する社会的な仕掛けとしてテストがあるようだ。これは多くの社会で共通のパタンがある。女性的な性質を示し、家族や社会がいわば「ベルダーシュ」の候補者ではないかと疑う少年を枯草で作った仮小屋などに入れる。そこには弓矢と籠など男性的役割と女性的役割を象徴するものが置いてある。そこに外から火をかける。動転した子供がとっさにどちらかをつかんで逃げ出してくるとされ、どちらを選ぶかによって判断するものである。女性的役割を象徴するものをつかんで逃げてくれば、「ベルダーシュ」として社会的に承認されるのである。これら以外の儀礼についてはその内容といかなる目的や性質のものかはラングの記述でははっきりしない。

「ベルダーシュ」とジェンダー

このようにして社会的に認められる「ベルダーシュ」のジェンダー上のカテゴリーはいかなるものか。ラングは「男でもない、女でもない」という一つの地位だという。これは地位の中に役割をその構成要素として含むと考えると良く分かる。生物学的地位の点では男であって、表現する役割が男性の場合、そのジェンダーは男性である。同じく生物学的に女であってその役割が女性のものならジェンダーは女性である。これに対して、生物学的には男であってその役割が女性のものである場

合、およびその組み合わせが反対の場合がある。これらが「ベルダーシュ」である。

したがって、「制度化されたホモ・セクシャルな関係」という問いに対してはラングは否定的に考える。「ベルダーシュ」と男性、あるいは女性との性関係はあるが、「ベルダーシュ」同士の関係は報告されていない。また、「ベルダーシュ」ではない男性同士の、普通の意味での性関係は深刻な制裁を招くタブーである(例えば以下に述べるナバホの場合狂気が結果する)。つまり生物的地位としてのセックスの関係ではなく、社会的定義としてのジェンダーの関係で見れば、「ベルダーシュ」は明らかにカテゴリーの別なものととの関係しか持たない。このことは「ベルダーシュ」が男性とも女性とも異なる独立のジェンダーカテゴリーであることを示すものであろう。

しかしながら、このような特徴をもつ「ベルダーシュ」を、果たして男性・女性に続く第三のジェンダーと考えることができるかは、一般的には考えることが難しい。ラングは「ベルダーシュ」をテーマとして、アメリカ先住民社会のいわば通文化的研究を行っているのであるが、一つ一つの社会の全体的記述の中で「ベルダーシュ」の宇宙論的位置付けを考えるような作業は十分ではない。私も現時点では十分には行えないが、一例としてラングも比較的「ベルダーシュ」の資料が豊かとしているナバホ族を取り上げ、少しでも詳しく具体的な脈絡で以下に検討したい。ナバホを選ぶ理由は他にもあって、ヒジュラと同じように間性の存在についての認知がはっきり示されている事例だからだ。このことは以

下の考察における比較によって有益である。

ナバホの「ベルダーシュ」の特徴

ヒルの論文(Hill, 1935)に主にしたがって紹介すると、ナバホ族の「ベルダーシュ」である「nadle」には次のような特徴がある。

ナバホ族は身体的に中間的な性を認識してそれに「nadle」という名を与えている。ヒルの表現ではhermaphroditeである。その他にヒルがtransvestiteと表現する人たちがいて、これにも「nadle」が適用される。しかしナバホの人たちは両者を区別していて、先天的な身体的特質を持つ前者は「本当の」「nadle」、後天的な存在である後者は「である振りをしている」「nadle」といつている。しかしヒルはそれぞれのナバホ語がいかなる表現か原語を表記していないので分からないが、形容詞もしくは接頭語的な要素などを付した複合語として表現しているであろうと思われる。単一の表現がそれぞれあるなら、概念として言語上も区別されていることになるからだ。なお、「nadle」は語源的には「変容したもの(するもの)」の意であるとヒルは言う。また、特にhermaphroditeをカテゴリーとして認識しているからといって、人におけるその現象の出現率が他の部族や民族と比べて高いわけではなく、ナバホの生業の一つである羊の飼養において観察されていることがもたれているとロスコー(Roscoe, 1998)はいう。ナバホはhermaphroditeな羊はそれ自体は不妊であるにもかかわらず、群れ全体の多産性を高めると考えている。

さらに、この「nadle」の区別が、個々の事例において厳密になされているわけではないことは、実際の伝記の事例から分かる。ヒルその他の人が接触した、一九世紀末から二〇世紀初頭に生きたある「nadle」の記録を再構成したロスコーは、この人物が果たして実際に「本当の」「nadle」であったかははっきり記録されていないことを確かめた。これはこの人物が傑出した人物であり、人々から深く尊敬されていたことを考えれば、そのような区別は文化的に重要視されないと想定する根拠となるかもしれない。

少年は一八歳から二五歳くらいの間には少女のように振舞うものがあることがある。それによって男性になるかそうでないかがはっきりする。少女についても同様で、両性についてそういうジェンダー的な変容が生ずる可能性は同等で、異性装者(transvestite)は男女同数であるとヒルは言う。しかし彼が紹介する事例はすべて「本当の」「nadle」か身体的には男の「である振りをしている」「nadle」で、他の資料においても私は今のところ女の「である振りをしている」「nadle」の事例の記述には出合っていない。

「nadle」はナバホの創世神話においてはその職分や活動がはっきり示されている。彼らは富と観念的に連合された存在である。ナバホ社会の、また「本当の」「nadle」となるべき子を持った家族の態度はその子に好意的で、その家族は幸運だと思つたとされている。その家族に富をもたらしてくれるとされているからである。おとなの「nadle」の経済的役割は二重で、性役割上の男性の仕事と女性の仕事の両方をこなす。

経済的な価値のある女性の仕事では機織、籠作り、陶芸、皮なめし、モカシン作りなどであるが、羊の飼育もする。これらが経済的なメリットを生み出す。勿論調理などの家内労働はするが、その他に女性の仕事として助産もするとされている。行わないとしてはっきりと除外されているのは、男性のすることのうち、戦闘と狩猟である。他に、ロスコーは女性の仕事のうち、羊毛を梳くこと、紡ぐことは「nadle」はやらないとしている。

また「nadle」は家族の長となり、家族の財産の管理を行う。これはロスコーによれば、ナバホ社会の母系制社会構造と母方居住婚に関連付けて理解できるかもしれない。家族の中の最年長の女性が家族の財産の管理を行うのである。その意味では「nadle」の特殊性と「nadle」の女性としての位置付けとがここでは区別しがたく混ざり合っているのかもしれない。

儀礼や呪術・宗教的な面では特別な特徴はない。大きな集会で調理をする女性たちの監督をするとされていることが記されているくらいである。ナバホは人類学上妖術の研究の事例で名高い部族であるが (cf. Kluckhohn, 1944)、「nadle」が他と区別されて特に妖術に関連付けられているわけではない。

いわば法的な身分の観点から言うと「nadle」は女性である。他の集団から殺された場合などの賠償である「blood payment」の時は女性と同じ額が支払われる。女性への賠償額は男性のそれより多い。それ以外のジェンダー的な特徴でいうと、異性装と言うより、混合装というべ

きもので、男性の服装をすることも女性のそれをするところもあるとこのことである。男と女の関係でいうと、調停者や媒介者、仲介者の役割をすることがある。男女の間で争いが起こったときの調停、男女の恋などの仲介である。

「nadle」の本質的な特徴として注目しなければならないのは、性的な面である。普通の人にとっては逸脱となるようなことも「nadle」の場合は社会から許容されている、あるいは期待されている。一つは「本当の」「nadle」の場合の、男性を相手にしての性関係である。「である振りをして」いる「nadle」の場合は男性とも女性とも関係することがあるらしいが、いずれの場合も特徴的なのはパートナーが固定せず変わるのが普通であることだ。

「nadle」に対しての行動の社会的な規範がある。それは敬意によって特徴付けられている。「nadle」をからかったり侮辱することは許されない。「nadle」に対してそのことには決して触れないというような配慮にそれは裏付けられているようだ。

以上のような特徴を勘案して、「nadle」はジェンダーの観点から男性・女性と並ぶ第三のカテゴリとして了解できるだろうか。ラングはそのように考えているようだが、次にヒジュラと比較しつつ総合的に検討してみたい。

五 考察

全く異なる文化を比較するのは、一般的には比較の常道に反するのだ

が、今回は、基礎に身体的な性の曖昧さが共通に認識されている事例を取り上げた。発見的な価値があることを期待しての上である。しかし、これは方法的に私の問題意識に矛盾する危険もある。その点を最初に考えておきたい。

つまり、身体的な基礎のある現象が性で、それは連続的であっても、実は双極的な現象であり、いずれの文化でもその男女と名づけるべき二つの極は認識していると同時に、文化によっては中間的な状態を認識し、名づけ、文化的な扱いを定式化している、というような論理になる可能性がある。しかし、ジェンダーが性概念を作るといふ仮説的立場にたつ限り、性も社会的構築物と考えざるを得ない。それを確認しておく。すなわち社会構築主義という「存在論的ゲリマンダリング」(cf. 平地編、二〇〇〇)の可能性を以下のような認識で否定しておきたい。

まず、外性器の認識でも基本的に未分化な(男女双方の特徴を併せ持つ、両性具有的な)ものと想定する文化がある。その場合、大人になる＝決定的に(ジェンダーとして)男性か女性になるために儀礼を通じて性器の表現も決定されなければならない。割礼を通じて余分な部分を除去することで、それは象徴的に実現される。(cf. グリオール、一九八一)

また、我々が性は生物学的なものと考えてる時には、誕生までの人為的な介入が性の変更を可能にすることがあるとは考えないが、受胎が分かった後からの介入で性が決定すると考えたり、出産時の出来事で性が変更されたりすることがあると考える文化もあるようだ。また、生物学

的に理解することは、性は決定した後は発達段階に応じて自動的に発現してゆくと理解することにつながるが、例えば男性としての性の完成には年上の男性たちの介入が不可欠であると考え文化もある。(Hardt, 1984, 1997) このように、「自然」の理解や、性と自然との結びつき概念が我々とは同じでない場合があることは当然の前提としなければならない。

その上で、あえてインドとアメリカ先住民の一部とを比較するのはいかなる意義があるかを問わなければならない。それは第三のジェンダーは概念として可能かを考えるときの思考モデルの形成という、理論的な意義に求めざるを得ない。何らかの理念的な比較の枠組みを作るための作業である。

その上で、今回の比較から引き出すことのできる問題点を整理する。

ヒジュラの理解と人のカテゴリー

ヒジュラについては聖と俗の対立の中で考えなければならない。ヒジュラははっきりと、通常の人のカテゴリーの中には含まれない。それはインド社会の「人」の定義から外れている。「人」はジェンダーを持ち、子孫を作らなければならない。何らかの事情でそれができない場合、不能であれなんであれ、それはいわば不完全な変則的な存在になり、意味付けることが難しくなる。しかし、それはインドの通常の俗なる社会の場合であり、そこから離脱することつまり聖なる存在になることで、別な意味が獲得できる。それがヒジュラの意味である。

先ず通過儀礼としてのイニシエーション儀礼において、「不能の人」は「豊饒性の媒介者」に変わる。世俗的で物質的で不能な器官を失うことで、逆説的に神話的・宇宙論的に万能な豊饒性を身につけるのである。祝福も呪詛もできる呪術的な力を付与される。またその儀礼によって、通常のインド社会の成員としては一度死ぬ。カーストからも離脱し、日常的な身体を生み出した親族的な絆からも自由になる。その代わりに新しい母娘、姉妹関係ともいべきヒジュラのネットワークに入る。師匠が改めて生み直してくれるような、そういう死と再生の儀礼がイニシエーションである。

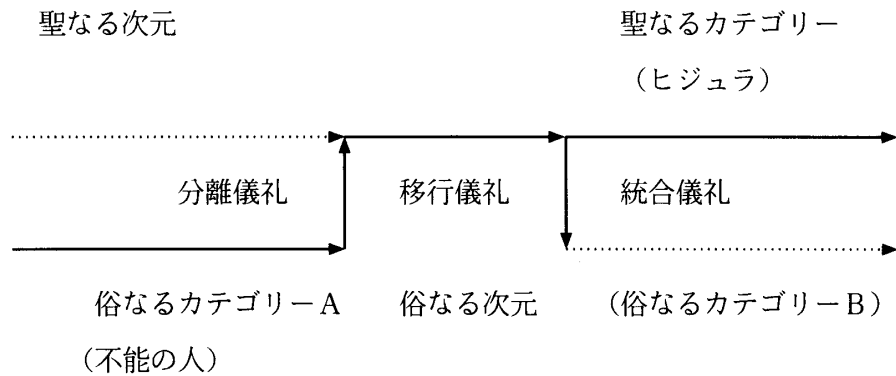
さらに「不能の人」というステイグマを逆転させ、対抗アイデンティティを形成する神話的伝承を彼らは持つ。彼らの存在を正統化する創造神話を持つことは、いわば全く異なる民族であることを示すかのような現象だ。これによってヒジュラはインド社会に存在していながらそこに属していないという、パラドキシカルな存在となる。インド社会とは聖なる次元を通じてのみ関連をもつ、独自の存在様態をとるのである。

聖と俗

この通過儀礼を通じての変容を簡単に概念的に図示してみよう。

この図1において、俗なるカテゴリーAは例えば結婚の儀礼において、結婚前の「娘の地位」と考えて見ると、俗なるカテゴリーBは結婚後の「妻の地位」と考えることができる。これらは通過儀礼中の一時的な聖

図1 通過儀礼の概念



なる次元（例えば「花嫁」や「ハネー・ムーン」など）への移行を別にして、どちらも日常的な俗なるカテゴリーである。通過儀礼を経て妻としての日常に女性は統合されていくのである。これに対して、世俗の存在としての「不能の人」の場合、通過儀礼としての去勢を経て統合されるのは、もう一つの世俗のカテゴリーにはではない。宇宙論的な世界の中での呪術的・神秘的な力の持ち主に変容するのである。通過儀礼のあとは位置付けの次元が異なっている。これは先に述べた、イタコなどの巫女の事例と構造的に相同であることに気付くであろう。

人のカテゴリー
ヒジュラの場合、人のカテゴリーとしては、異質な、非日常的な存在であるとすれば、それに「ジェンダー」概念は適用しにくい。つまり男性とも女性とも異なる「第三のジェンダー」としてヒジュラをみなすこ

とは適当ではない。私は存在の次元が異なる場合には同一あるいは同質のカテゴリーを適用することはできないと考える。

これに対してナバホの「*na'ale*」の場合はどうかであろうか。先の記述で見る限り男性と女性の中間のカテゴリーともその混合カテゴリーとも、その本質の規定については今のところ判断が難しいが、日常的な一つのカテゴリーのように見える。まずはっきりした通過儀礼がこの場合認められない。その地位に結びついた特別な儀礼的、あるいは呪術・宗教的な力が明瞭ではない。なによりも、創世神話において、男と女と並ぶ一つのカテゴリーとして間性が区別されていることは、大きな意味を持つように見える。

しかし、全く普通の人であるわけではなく、特に富と結び付けられて特別視されていることは別として、ことさらにそれに対する敬意が社会的に要請されていることは、かえって不自然さを感じさせ、他の成員との潜在的な緊張を想定させるようにも思える。例えばヒジュラはカテゴリーとしてアンビギュアスではない。これに対して「*na'ale*」はカテゴリー自体がアンビギュアスに見える。しかし現時点では私の資料探索が十分ではなく、的確な判断が難しい。

これは性のカテゴリーがどのような構造になっているかと関係するところかもしれない。インドの場合、ナンダも指摘するように基本的に欧米と同じ二項対立的な性概念である。だからこそ中間的なカテゴリーは日常のカテゴリーとして位置付けることができず、位置付けるとしたら、いわばその外側の非日常の次元に置かざるを得ない。これがヒジュラの

位置付けとして現に生じていることである。これに対して、ナバホの場合、創世神話からも分かるように、はじめから間性は男女に並ぶカテゴリーとされているかのようなのである。窮屈な二項対立的性概念でなく、緩やかなものであれば、日常的なカテゴリーとしても受容が可能になる。それだけではなく、ナバホ文化には（また多分アメリカ先住民のいくつかのグループには）個人がどのようなカテゴリーの表現をとるかについてのかなりの自由度と社会的な寛容度が認められるのではないかと思われる。これが性概念とは独立の特徴であるのか、性概念の緩やかさに依存している現象なのか、興味のあるところである。私が本稿で扱った問題は人のカテゴリーと共に個人（人）の概念、あるいは個人と社会の関係にも潜んでいるのではないかと思われる。

個人と社会

アメリカ先住民の中には「ヴィジョン探求」(vision quest)を行う文化があることは先に述べた。ひとたびヴィジョンが獲得されると、内面化された守護霊のようになって個人の行動の指導を行う存在になる。個人は他の集団成員に依存しない独立行動のとれる存在になる。このような「内面化された他者」というべきものはアメリカ大陸だけではなく、アフリカの文化にも知られている。この他者が祖霊などである場合には、容易に憑霊状態というべき現象が生じたりする。(cf. 阿部、一九八二)

これに対して内面的な独自性に基づく独立した人格というのは欧米近

代の人格概念だが、その原型は、キリスト教の砂漠の修道院などで神との内面的対話を追求した修道僧などの世俗外個人であるとする理解もある。(註) カリザス他、一九九五、デュモン、一九九三) そうすると内面に他者を組み込むという点では、一見アメリカ先住民などの文化と古代キリスト教の文化とでは異ならないかのように思える。果たしてそうなのか。厳しい一神教の神の内面化と、アニミスティックな、森羅万象に生命と霊とを認めるような文化における動物霊などの内面化とでは異なるところがあるのかもしれない。

欧米でのマイノリティの解放運動は、近代の個人主義を背景に理解しなければならないだろう。女性解放運動もゲイやレズビアンの運動もそうである。個人の尊厳と自由の観念をもとに人が自己の表現と存在の社会的認知を求めたのがそれらの運動だろう。固い二項対立的な性概念の中では例えば同性との関係は逸脱行為とされ、その社会的制裁に抗して自己表現を続けることは内面のある種の強さを要請するだろう。こういふときに個人の行動を支える内面の人格は「ベルダーシュ」を選び取る、あるいはそのようになっていく人格とどのように異なるのだろうか。勿論ナバホには「ヴィジョン探求」は文化項目としてはないが、アメリカ先住民共通の人格特性があるかもしれない。そのようなことも含めて疑問は深まる。結論を得るには程遠いが、問題の所在を見出すことはできたとように思う。

注

本稿で用いた資料は、平成13年度の跡見学園女子大学特別研究助成金によって可能になったサンフランシスコ出張で得られたものが多い。カリフォルニア大学バークレイ校図書館などで資料複写が可能になった。記して当局、関係各位のご好意に感謝する。

参考文献

- Blackwood, Evelyn. 1986. *The Many Faces of Homosexuality*; *Anthropological Approaches to Homosexual Behavior*. New York: Harrington Park Press.
- Bolin, Anne. 1996. "Transcending and Transgendering: Male-to-Female Transsexuals, Dichotomy and Diversity." in Herdt, ed. 1996: 447-86.
- Broch, Harold. 1977. "A Note on Berdache among the Hare Indians of Northwestern Canada." *The Western Canadian Journal of Anthropology* vol. III, no. 3: 95-101.
- Herdt, Gilbert. ed. 1984. *Ritualized Homosexuality in Melanesia*. Berkeley: University of California Press.
- Herdt, Gilbert. ed. 1996. *Third Sex, Third Gender*. New York: Zone Books.
- Hill, Willard. 1935. "The Status of Hermaphrodite and Transvestite in Navaho Culture." *American Anthropologist* vol. 37: 273-79.

- Jacobs, Sue-Ellen. et al. 1997. *Two-Spirit People: Native American Gender Identity, Sexuality, and Spirituality*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.
- Kluckhohn, Clyde. [1944]1967. *Navaho Witchcraft*. Boston: Beacon Press.
- Lang, Sabine. 1998. *Men as Women, Women as Men*. Austin: University of Texas Press.
- Nanda, Serena. 1996. "Hijras: An Alternative Sex and Gender Role in India." in Hardt, ed. 1996:373-417.
- Nanda, Serena. 2000. *Gender Diversity: Crosscultural Variations*. Prospect Heights, Illinois: Waveland Press.
- Roscoe, Will. 1998. *Changing Ones: Third and Fourth Genders in Native North America*. New York: St. Martin's Press.
- Williams, Walter. 1986. *The Spirit and the Flesh*. Boston: Beacon Press.
- 阿部年晴 一九八二 『アフリカ人の生活と伝統』 三省堂
- カリザス、M. 他編 一九九五 『人というカテゴリー』 紀伊国屋書店
- デュモン、L. 一九九三 『個人主義論考』 言叢社
- 藤崎康彦 一九九八 「東北地方の巫者の一類型と意識の変容状態」 大胡欽一編 一九九八『アジア世界：その構造と原義を求めて「上」』八千代出版所収
- グリオール、M. 一九八一 『水の神』 せりか書房
- 原ひろ子 一九八九 『ヘアー・インディアンとその世界』 中央公論社
- ハート、G. 二〇〇二 『同性愛のカルチャー研究』 現代書館
- 祖父江孝男 一九七九 『文化人類学入門』 中央公論社
- 平 英美 他編 二〇〇〇 『構築主義の社会学』 世界思想社